

## トカラ列島採集品目録

秋山博志・前田喜四雄

ここでは1965年7月～8月に諏訪之瀬島と悪石島に於て秋山の採集したものと1963年7月～8月に宝島で前田の採集したものを報告します。

甲虫類、蛾類、直翅類、膜翅類等については整理のつき次第報告します。

この目録では奄美大島の採集品も少し含めた。

### セセリチョウ科

#### HESPERIIDAE

1. チャバネセセリ  
*Polopides mathias aberthuri* Evans  
3ex., VII. 29～VIII. 2. 1965, 諏訪之瀬島
2. イチモンジセセリ  
*Parnara guttata* Bremer et Grey  
2ex., VII. 7～8. 1965, 諏訪之瀬島

### アゲハチョウ科

#### PAPILIONIDAE

1. シヤコウアゲハ  
*Byasa alcinous* Klug  
1ex., VII. 14. 1963, 奄美大島・名瀬
2. モンキアゲハ  
*Papilio helens uicconicolens* Butler  
1ex., VII. 14. 1965, 悪石島
3. アゲハ  
*Papilio xuthus* Linne  
1ex., VII. 1. 1965, 諏訪之瀬島
4. クロアゲハ  
*Papilio protenor demetrius* Cramer  
2ex., VII. 26～30, 宝島
5. ナガサキアゲハ  
*Papilio memnon thunbergii* Siebold  
2ex., VII. 23～31, 宝島

6. カラスアゲハ  
*Papilio bianor dehaanii* Feldel et Feldel  
4ex., VII. 23～29. 1965, 諏訪之瀬島
7. シロオビアゲハ  
*Papilio polytes polycles* Fruhstorfer  
1ex., VII. 10. 1965, 悪石島にて目撃
8. アオスジアゲハ  
*Graphium sarpedon nipponum* Fruhstorfer  
1ex., VII. 3. 1963, 宝島  
4ex., VII. 4～8. 1965, 諏訪之瀬島  
1ex., VII. 17. 1965, 奄美大島・名瀬

### シロチョウ科

#### PIERIDAE

1. キチヨウ  
*Eurema hecabe mandarina* de lorza  
2ex., VII. 17. 1965, 奄美大島・名瀬
2. ギンモンウスキチヨウ  
*Catopeilia pomona* Fabricius  
1ex., VII. 14. 1963, 奄美大島・名瀬
3. ツマベニチヨウ  
*Hebomoia glaucippe shirozui*  
Kurosawa et Omoto  
3ex., VII. 26～29, 宝島

### シジミチョウ科

#### LYCAENIDAE

1. ムラサキシジミ  
*Arhopala japonica* Murray  
2ex., VII. 17. 1965, 奄美大島・名瀬
2. ヤマトシジミ  
*Zizeeria maha argia* Menetries

- 11ex., VII. 22~VIII. 8. 1965, 諏訪之瀬島  
 5ex., VIII. 12~14. 1965, 悪石島  
 1ex., VIII. 17. 1965, 奄美大島・名瀬
3. ウラナミシジミ  
*Lambides boeticus* Linné  
 2ex., VIII. 2. 1965, 諏訪之瀬島
- マダラチヨウ科  
 D A N A I D A E
1. リユウキユウアサギマダラ  
*Radena similis* Linné  
 1ex., VIII. 14. 1963, 奄美大島・名瀬  
 1965年8月, 悪石島で目撃
- タテハチヨウ科  
 N Y M P H A L I D A E
1. アカタテハ  
*Vanessa cardui* Linné  
 2ex., VIII. 8. 1965, 諏訪之瀬島
2. ルリタテハ  
*Kanisisika canace no-japonicum* Siebold
- 1ex., VII. 25. 1963, 宝島  
 1ex., VIII. 12. 1965, 悪石島
3. タテハモドキ  
*Presis atmana* Linné  
 8ex., VII. 29~VIII. 9. 1963, 宝島  
 25ex., VII. 23~VIII. 8. 1965, 諏訪之瀬島  
 1ex., VIII. 12. 1965, 悪石島  
 1ex., VIII. 17. 1965, 奄美大島・名瀬
4. リユウキユウムラサキ  
*Hypolimnas bolinaphippensis* Butler  
 1♀ VIII. 8. 1965, 諏訪之瀬島
5. ツマグロヒヨウモン  
*Argyreus hyporbius* Linné  
 6ex., VII. 23~VIII. 7. 1965, 諏訪之瀬島
- シヤノメチヨウ科  
 S A T Y R I D A E
1. ヒメシヤノメ  
*Mycalasis gotama madjicosa* Butler  
 2ex., VIII. 17. 1965, 奄美大島・名瀬

## 南アルプス採集品目録 (Ⅱ)

水 野 弘 造

- § コメツキムシ  
 コメツキムシは花上で採つたもの ((5)など), 燈火に飛来したもの ((7)など) 以外は殆んど叩き網で落ちたものである。石起しはやつていない。採集品を岸井尚氏に同定願つたところ次の19種が含まれていた。岸井氏に深く感謝する次第である。
1. *Colaulon scrofa* Candéze  
 ヒメサビキコリ
2. *Mucromorphus montanus miwai* Kishii  
 ミドリツヤハダコメツキ
3. *Quasimus japonicus japonicus* Kishii  
 ニホンマメコメツキ
4. *Nagasterius curatus* Candéze  
 キアシミズギワコメツキ
5. *Ancstirus daimio* Lewis  
 イツボシヒラタコメツキ
6. *Calumbus mundulus* Lewis  
 クロツヤヒラタコメツキ
7. *Harminius singularis* Lewis  
 ムネスジダングラコメツキ
8. *Scutellathous comes comes* Lewis  
 チャイロツヤハダコメツキ
9. *Stenagostus umbratilis* Lewis  
 オオツヤハダコメツキ
10. *Hemicrepidius secessus secessus* Candéze  
 クロツヤハダコメツキ
11. *Miwacrepidius subcaneus* Motschulsky  
 ルリツヤハダコメツキ
12. *Gamepenthès versipellis* Lewis  
 メスアカキマダラコメツキ
13. *Ampedus optabilis* Lewis  
 オオアカコメツキ
14. *Ampedus fagi* Lewis  
 ファグアカコメツキ
15. *Cratonychus cariuatus* Matsumura  
 ハネナガクシコメツキ
16. *Ecutinus candezei* Lewis  
 カバイロコメツキ
17. *Metaricus viridus* Lewis  
 ミドリヒメコメツキ
18. *Silesis musculus* Candéze  
 クチブトコメツキ
19. *Paracardiophorus pullatus* Candéze  
 コハナコメツキ

## § 雑 甲 虫 (その I)

以下北隆館「原色昆虫大図鑑 II」によつて種名と判明したものを和名のみ列挙する。

## ○ ナガクチキムシ科

アオバナガクチキ  
ヒメカツオガタナガクチキ  
オオクロホソナガクチキ  
キスジナガクチキ  
ムナクボナガクチキ  
ボウズナガクチキ

以上 6 種

## ○ ベニボタル科

ホソベニボタル  
キタベニボタル  
クロバヒシベニボタル  
クシヒゲベニボタル  
クロベニボタル  
スジグロベニボタル  
ジユウジベニボタル  
ヤマトアミメボタル  
スジアカベニボタル  
クロアミメボタル  
ベニボタル  
クロハナボタル

以上 12 種。私の過去の採集地中、南アルプスは北アルプス槍平に次いでベニボタル多産地であつた。

## ○ キカワムシ科

オオキカワムシ  
三伏峠で 1 頭のみ。

## ○ アカハネムシ科

オオクシヒゲヒロウドムシ

## ○ アリモドキ科

クロホシホソアリモドキ  
ムナグロホソアリモドキ  
ケナガクビボソムシ

以上 3 種。最後の種は叩き網で 2 頭。

## ○ ツチハンミョウ科

キイロゲンセイ  
鹿塩温泉で燈火に 2 頭飛来。

## ○ ハナノミ科

キボシハナノミ

他に 1 種

## ○ コガネムシ科

ヒメスジコガネ  
キンスジコガネ  
オオチャイロハナムグリ  
アオアシナガハナムグリ

オオトラフコガネ

セマダラコガネ

オオスジコガネ

コイチャコガネ

他にチャイロコガネ一種 (*Sericania* sp)。食糞性コガネ類は土地柄みられなかつた。

## ○ クワガタムシ科

ヒメオオクワガタ  
ミヤマクワガタ

二軒小屋の燈火に多数飛来するが殆んど♀ばかりであり、この他にも種類があるものと思われるが判定しにくい。

## ○ オオキノコムシ科

オオキノコムシ  
カタモンオオキノコ  
ベニヘリチビオオキノコ  
コクロオオハバヒロキノコ  
クロハバヒロオオキノコ  
ベニモンハバヒロオオキノコ  
キイロチビオオキノコ  
クロチビオオキノコ  
アカハラチビオオキノコ

以上 9 種。林間の朽木を探すと個体数はかなり採れる。最も大型のオオキノコも大小一度に 7 頭も落ちて来た。たんねんに探せば種類はもつと増えるであろう。私の経験では個体数は奈良春日山に次ぐ豊富さである。(つづく)

## — おとしぶみ —

## 四国産甲虫数種 (その 2)

下記の虫は北隆館「原色昆虫大図鑑 II」に四国は産地として挙げられていないが、次のデータによる土居祥克君採集の標本を筆者は所蔵している。

1. *Pediacus japonicus* Reitter  
クロムレキカワヒラタムシ  
1954年 5 月 22 日 高知市内
  2. *Dendrophagus longicornis* Reitter  
ヒゲナガヒメヒラタムシ  
1954年 7 月 27 日 高知県工石山
  3. *Ptinus hirtellus* Sturm  
ヒメヒョウホンムシ  
1954年 4 月 19 日 高知市内
  4. *Anthicus fugiens* Marseul  
アカホソアリモドサ  
1954年 3 月 27 日 高知県工石山
- 以上。 (水野弘造)

## 南西諸島採集記

秋山博志

1965年7月13日から9月14日までの約2カ月間北は鹿児島島の西南海上300Km付近に点々と浮かぶトカラ列島から南は台湾を望む琉球列島の与那国島までテントかついでの採集旅行を試みた。

同行者はトカラ列島では海藻採集の岡大理学部の岩月君、琉球列島の一部では同好会の西君であった。又この採集行について資金援助並びに薬品等の提供をして戴いた同好会顧問の重井先生、又いろいろの面でお世話になった同好会理事の方々、国立科学博物館の中根猛彦氏、上野俊一氏、旅行中お世話になった数多くの人々に厚くお礼申し上げます。

次にこの旅行について手記をもとにして報告をしておきます。この紀行文が今後何かの役にたてば幸いです。

## トカラ列島

鹿児島島の西南海上約200Km付近の口之島から南へ中之島、臥蛇島、平島、諏訪之瀬島、悪石島、小宝島をトカラ列島といい、温帯から亜熱帯へと移行する途中の昆虫相は生態境界線の点で興味あるものである。

交通機関が極めて不便なために今までその昆虫相はあまり明かかではない。

今までの調査は宝島、中之島において行なはれており他の島ではほとんど行なはれていない。

そこで今回の採集としてはトカラ列島のうち宝島と中之島の中間に位置する諏訪之瀬島と悪石島を選んだ。諏訪之瀬島は周囲20Kmあまりの今なお噴火を続けている火山島で全島火山灰あるいは熔岩におおわれている。戸数10戸あまり住民は60人程度でありほとんど全員が近年になつて奄美大島笠利町から移住したものである。部落には全然川は認められず水たまりもないただ豪雨の際数時間流れるような枯れた谷がみられるだけである。

島のまわりは珊瑚礁で囲まれており潮が引くと500m位沖合まで姿をみせる所もある。

植物としてはリュウキユマツ、ソテツ、ピロー、ガジュマル、タブ、クロキ、シャリンバイ、カクレミノトベラ、マルバサツキ、ツワブキ、イタドリ、ハチジョウススキ、コシダ、ホラシノブ等が認められ島の大部分はササでおおわれている。昆虫相は極めて貧弱で水がないためか水棲昆虫はほとんど認められない。

作物害虫、衛生害虫共に少なく蚊やノミに悩まされることもない。農業は最近ではヘパタ等を用いて十分

効果をあげておりサツマイモの害虫アリモドキゾウムシも認められなかつた。稲作は行なつているが自給には程遠い。

畑作としてキュウリ、トウガン、カボチャ、ウリ、スイカ、サツマイモ等があり特にスイカはよくできる。カエル、ヘビはいなくただ海にエラブウナギがみられる。山羊とか牛の一部は島の北側に放牧されている村営と部落の2つの牧場があるが牧草はなくササとかその他の雑草が生えているだけである。牧草はササを切り開いて播種してもすぐにササが進出してくるのだそうである。

悪石島はやはり火山島で諏訪之瀬島と大体同様な景観を示している。土質は粘土質で水たまりが多くそのため蚊とかその他の衛生害虫が多い。アリモドキゾウムシも数年前まで相当の被害をあたえていたがいまは農業によりすくなくなつている。ヨトウの類が多くて野さいは相当やられているようである。

悪石島は平家の落人が住みついたという伝説があり古い社の跡や墓地がみられる。

最近「美女とネズミと神々の島」という本を書いた朝日新聞社記者の秋吉氏がこの島を訪れそのルポルターージュが新聞に載つて以来人の訪れが多くなつたそうである。

両島共に風土病のフィラリアがみられる。

現金収入の大部分は諏訪之瀬ではトビウオとマクリであり悪石ではトビ魚と大島つむぎであり生活はきびしい。

岡山から諏訪之瀬へ

7月13日 住友銀行にて沖縄で使用するドル交換をして17時28分岡山を出発

翌14日朝東洋のナポリ鹿児島に着く。タクシーにて汐見町にある十島村役場に行き総務課長折田氏及び村長に会い島の現状について伺う。船は18日出航とのこと。船待ちのため鹿児島島のあちこちを見て歩くことに決める。昼食のために岸壁通りに行くところ沖繩航路のみめゆり丸が出航するところであつた。役場に装備、食料を預けておいて天保山公園に行きテント設置。桜島が静かに煙をはいている。

7月15日 天保山公園で1日過ごし夜桜島の林英美子記念碑のすぐ上に移動テント設置。

7月16日 朝岩道路を通り海潟に行く。キャンプ地はバス停留所のすぐ近くで温泉があり海水浴もでき桜島が眼前に迫り気持のよい所である。

7月17日 1日中風強く涼しい。温泉に入り明日への出航に備える。

7月18日 起きてテントの外に出していたキャラバンシューズが盗まれているのに気付く。

他のテントでも時計などの盗難があつたとのことあきらめる。

船にて鹿児島港に行き役場を訪れたが十島丸の予定が狂い20日出航とのこと。予定大いに狂う。汽車にて薩摩半島の今和泉に移動。

船が遅れたのは口之島で病人が出たためらしい。

ラジオでは臥蛇島の子供達が鹿児島島に来た事を報じている。今和泉の海岸はクラグ、カシパン、ウニ等が多い。泳いでいて毒クラゲに刺される。

ハギツルクビオトシブミ、ホシボシゴミ虫等採集。モンキアゲハ、ジャコアゲハ、キチヨウ、ヒメウラナミジャノメ等をみる。キャンプの近くの小学校にはゴムの木、ココヤシ、ハマユウ等南洋的な植物が多い。海は青く澄み遠く対岸に桜島を望む。

7月19日 昼頃からヒッチハイクにて池田湖から長崎島に行く。快晴で南国の太陽は強烈であり汗が吹きでる思いである。途中唐船岬に立ち寄りソーメン流しを食べる。

長崎島は太平洋の荒波が溶岩を洗いすく近くに開聞岳が迫つてその上には傾きかけた太陽が輝いていた。左手に佐田岬が長くつき出している。

遠く水平線上には硫黄島、竹島がかすんで見える。磯には極彩色の魚が泳ぎ。南国調のカニが歩きまわり色とりどりの珊瑚がまるで海岸のお花畑のように開いている。山にはソテツがみられる。

山川までバスでそこから汽車で今和泉まで帰る。食事の途中マスククロホシタマムシを拾う。その夜は土地の観光協会の人々と大いに飲み歌う。明日の出航を皆で祝ってくれる。

この日の収穫はヨツスジトラカミキリ、コマルキマワリ、リツマコフキコガネ、オオテントウ、ヒョウタンゴミムシ、アカビロードコガネ、アオドウガネ等。

7月20日 8時30分鹿児島島に帰り役場に行く。どうやらやつと出航できるらしい。教育委員長に会いいろいろと注意をうける。島の学校への宿泊について紹介状をお願いする。昼から市内にて一ヶ月分の食料と装備の買い出しをする。

土産のウイスキー、果物かごも忘れずに加える。リヤカーで荷物を役場から十島丸まで運び込み悪石島へ送る食料を船員に頼んでおく。町の風呂屋に行き船に乗り込むと教育委員長が紹介状を持ってきてくれる。もう船の中はあわただしい空気がみなぎっている。見送る人と見送られる人とのあわただしい動きが止む

と十島丸は静かに岸壁を離れる。夕暮れの町を後にして約2時間わずか250トンの十島丸は開聞岳、佐田岬を通過して東シナ海の荒波の中に放り出される。これから約2ヶ月にわたる琉球列島と那国島までの船旅の始まりだ。船内はむしろ暑くて眠れないので皆甲板で毛布にくるまり思い思いのかつこうでゴロ寝する。

7月21日 目がさめたのが5時頃、目の前に黒々と島が迫る。中之島だ。船はスピードをおとして気笛を鳴らす。島の沖合い500m位の所に停泊する。

朝食を注文したが船酔いの為一口もどを通らないだがそれも次第に明るさを増したコバルトブルーの海面をみると急に気分が良くなる。海は内海と違って波も大きくそれが珊瑚礁にぶつかって一面に白い波しぶきをあげる。船が停泊して約2時間あまり小さな川をはさんだ両側の海岸部落から前後してはしけがやつてくる。どちらの部落か先に出る順序が決まっています。片方が出ないと片方は絶対出て来ないとのことである。

はしけは1トン前後の小さな船でうねりの中で大きく上下しながら十島丸に向かう。荷の積み具合で停泊時間は変わる。先にお客さんを満載して海岸まで帰って行き次に荷物を載せる。工事用のトラックなども小さなはしけで陸揚げする。

船の上からは諏訪之瀬島、平島、などがかすんで見える。船に居てもたいくつなので昼前工事用荷物と共に陸に上げてもらう。港がないので島民の人達の支えるハシゴを伝って上陸しなければならない。

上陸するとまずビロー、ソテツ、バナナなどがみられる。海岸には3ヶ所ばかり温泉の湧き出る所がある。温泉場付近では真紅の花が乱れ咲いて道端の花にはハチの類、リュウキユウリボシカミキリ、オキナワイモサルハムシなどがみられる。

ツマグロヒョウモン、カラスアゲハ、モンキチヨウ等が飛びタテハモドキも多い。

川では子供達が先にはりのついた竹を石の間につつ込んでウナギを釣っている。もう大きなのを2匹釣り上げてかごの中に入れてある。海岸近くの小屋にはトビ魚のいつげいつまつたタルをたくさんおいてある。

海岸で採集をしているうち一人の老人に家に来ないかと誘われ少し山の上にある家に行きお茶を飲みながら島についての話をいろいろと伺う。家からは沖に泊まっている十島丸が波にゆられてあちこちと向きを変えているのがみえる。庭には陸生のヤドカリの大きなのがゴソゴソとはいまわつている（これは諏訪之瀬、悪石では一匹も姿をみなかった。前田君の話では宝島の砂丘に多いそうである。）

船が気笛を鳴らし始めたので急いで海岸までかけ下りてこれが最後のはしけだという小船に乗り込み乗船

したがなかなか船は出ようとしないう。

どういわけかその後何度もはしけは船と海岸とを往復している。

船尾では船長がもうバケツにいつばいサバみたいな魚を釣り上げている。それを見て釣道具を出し魚の切身をつけて海の中に放り込んだがきつぱりつれない。船の上から見ると海の中にたくさん魚が泳いでいるのが見える。

これから訪れる諏訪之瀬島の前村会議員の息子で鹿兒島の高校に通っている園山君にはりのつけ方餌のつけ方等について教わる。結局彼が一匹釣り上げる。

走っているとき細いロープにトリの羽で作った偽餌をつけて流していると時々サメとかマグロとかの大型の魚がかかり船を止めて引き上げるそうである。

乗船してから2時間程してようやく船は口之島に向け動き出す。半日以上も中之島に居たことになる。約1時間で口之島に着く。ここでは港が出来ているのではしけは岸壁に横づけ出来る。どこの島でもそうだが船が着くと部落全員の者が港に集まり荷役とかいろいろの仕事をこなす。お客と共に最初のハンケで上陸してバツクなどをつかまえる。スコールがやつて来たが2時間ばかりで止む、ここでもトビ魚がたくさん小屋の中に置かれてある。島の人は皆素朴で親切である。

7月22日 臥蛇島、平島では波が高くてはしけが出ないで通過。諏訪之瀬島に午前1時過ぎに着く鹿兒島を出てから約30時間ようやく着いたのだ。

船からみていると島の中腹あたりから懐虫電灯の光が下へ下へと下りて来る。船のサーチライトが島のまわりを取囲む絶壁を照らし出す。波が荒いのではしけはなかなかやつて来ない。約1時間ばかりして真暗の海面に一隻の小舟が姿をみせる。はしけの第1便で上陸する。はしけはたくみに珊瑚礁の間を通り岸に近づく。暗闇の中での上陸は命がけだ。途中何度も波をかぶりながら進む。

岸に近くなると一人が海の中に飛び込みロープを持って岸に泳ぎ着く。そのロープを使って舟を引き上げる。宿舎の事を頼んでいた小中学校の重久先生が急病の為、奄美大島の名瀬に向うとのことであわただしく挨拶をすませてから見送る。

先生をしている重久先生の奥さんも後のことを子供に頼んで出かける。20人足らずの子供達は十島丸でやつて来た医者に順序よく日本脳炎の予防注射を受けている。

最後のはしけが終ると子供達に案内してもらって港からすぐ続いている急坂を登る。子供たちは慣れたもので我々の荷物を「シタミ」というかごに入れて運んでくれる。荷物の一部は港の小屋に入れておく。盗ま

れる心配は全然ない。

我々と同時に上陸したのは3日間同宿した学習院大学の小林君で経済調査をやつているとのこと。

福岡のしんつくし山岳会の立石氏と菅原氏もいつしよに上陸した人達だ。

小中学校に行き荷物を置いて園山家の長男に案内してもらって園山家に行く。園山家の主人は前村会議員で今はこの島の顧問役みたいな事をしている人でたいそうよい人である。

トビ魚をさかんにシヨウチュウを飲みながら主人と明け方まで話し込む。

蛍光灯は明け方までつけたままである。自家発電の為電圧が下がると灯は消える。普通10時消燈とのこと2時間ばかり娘さんのひいてくれた床で眠る。朝食をごろそうになり総代の所に挨拶に行き園山家の子供に案内してもらって宿舎に行く。宿舎の隣の人が我々のかまどを作ってくれ、たき木も割ってくれている。

海岸まで荷物を取りに下りる。天気は上々沖に悪石島がぼつかりと浮かんでいる。少し歩くと汗だくになる。火山灰の為足はすぐ泥まみれとなる。海岸まで行くと平島が目前に浮かんでいるのが見える。沖の方には四国、南九州あたりからのかつお船が白く浮かんでさかんに船側から水を流している。麻紋のおもしろいテントウをつかまえる。

海岸は波が荒くてトビ魚の漁は出来そうにない。

船酔いのため地面がゆれているようで気分が悪い。

カンパンとコーヒーで昼食をすませ夕方まで眠る。

昼間は輻射熱がひどくて採集どころではない。部屋の気温は34℃位まで上つている。

この島では水の不便が極めて悪く島の裏から細いパイプを引いて1週間に一度だけ各戸備えつけのコンクリート製のタンクに補給して飲料水とか風呂水に使っている。それ故風呂にはめつたに入れない。我々の食事の水は隣家のタンクから少しづつ分けてもらうことにする。

数年前までは水ガメに天然水(雨水)を貯えて使つたり港近くに湧き出る少し塩気のある水をかいつで上げて飲料水にしていたのだそう。

夜は園山家で我々のためにわざわざわかしてくれた風呂に入れてもらう。

夜宿舎の近くで夜間採集を行なう。オキナワノゴギリクワガタ、ウスチャマゴソコガネ、アマミピロードコガネ、アマミアオドウガネ、チャイロヒメカミキリリュウキユウヒメカミキリ、コハンミヨウ、オオシマゼミ等が飛んで来る。蛾も少し集まる。夜間採集中奇怪なサソリモドキを見る。

宿舎に戻りスズメ蛾3匹採集。立石氏が御岳に登つ

た際捕えたヒメハルゼミを持つて来てくれる。山腹ではコノマチヨウらしきものを見たとのこと。

7月23日 一人で村近くの枯谷に行つてみる。上の方に向かつて行つたが小さな蛾以外に何もめぼしいものはない。時折上の方をカラスアゲハが飛ぶ。牧場に出るまでにオキナワノコギリクワガタの♂1匹とヒョウタンゾウの一種 *Sympiezomias cribricollis* 等を捕える。牧場の所から谷の上に登りカレハ蛾の幼虫にびくびくしながら琉球マツの林をやつとすることで抜け園山家に行く。少し休んで園山の娘さんに案内してもらつて切石海岸に行く。途中で稲畑を見たが畑はカフカフで実入りはきわめて悪い。切石海岸は大潮の時現われる珊瑚礁が海面下1.5m~2.0m位の所に発達している。波は荒く2m位の大波が時々思い出したように押し寄せて来る。海岸は火山灰と溶岩である。あたり一面打ち上げられた船の破片、大きな材木などが散らばつており海ガメの死体が異様な匂いを放っている。溶岩の間にはフナムシが黒くなるほど動いており水たまりにはウツボとかウニ、カニ等がみられる。泳いでいると小林君と岩月君の二人としんつくし山岳会の二人がやつて来る。

小林君にモリを借りもぐつて魚を突こうとしたが駄目であつた。色とりどりの珊瑚礁の間を群になつて泳ぐ極彩色のシマダイとか名も知らぬ魚が泳ぎまわっている様子はまるで夢の世界かと思われる程である。

浜にはハマゴウとかグンバイヒルガオがたくさん見られる。海岸から御岳の煙が見える。

帰りに園山家に立ち寄りお茶を上げられる。宿舎に帰り夕飯の仕度をしていると裏の竹やぶの中からピカピカと光るものが出て来るのをみてすぐ網を取り出し捕える。黄色い小さなホタルであつた。後で調べてみると南方からトカラ列島にかけて分布しているキイロシジボタルであつた。ヤエヤマトラカミキリ等も昼間捕える。夜間採集ではヨツモンキバケシキスイ、アカマガラケシキスイ、リュウキユウヒメカミキリ、トカラカミキリモドキ、シロヘリハンミヨウ、イツホシツヤゴモク、トカラアオドウガネ、リュウキユウスジコガネ、フチケマグソ、ウスチヤマグソ、ウスイロマグソ等と共に蛾も少々やつてくる。この日から当分の間朝味噌汁、昼カンパンあるいはラーメン、カンヅメ、夜はカレー、トピウオ、キューリの生活が続く。ビタミン補給の為毎日ビタミン剤を服用する。

7月24日 昨日炎天下を歩きまわつたり海で泳いだりしたので朝は頭が上らない。昼間は男多く虫が少なく結局夜間採集が一番有効な採集法であることを悟る。採集に出かける気力もなく隣のこの島一番のダイバーで石垣島出身の上地氏の所に行きいろいろと話を伺

う。水中眼鏡をつけただけで15m以上ももぐり魚を突いたりこのあたりの海に豊富なベッコウガメ、エラブウナギ、夜光貝等を採集して、生計をたてているとのことである。捕えて箱の中に入れてあるエラブウナギを見せてもらう。水も餌も与えなくても1カ月位は死なないとのこと。またウミマツとかカカラ貝なども見せてもらう。

昼過ぎ小林君と山岳会の人を見送りに港まで行く。夜は園山家に行き風呂に入れてもらう。帰つてから宿舎の前でリュウキユウマゼミが脱皮のためノコノコと出ているのを見つけ三脚を立てフラッシュを用意して待つ。なかなか出ないので家に入り整理をして外に出たところもう脱皮が終わつていた。脱皮直後のセミの体は白い毛を持ち翅は淡緑色に輝いている。夜間採集は昨夜とほとんど同じ種類しか飛んで来ない。

7月25日 朝のうち少し頭痛がするので昼まで菓を飲んで眠る。昼より虫の整理をして我々の洗濯用のタンクの掃除をする。掃除を終えてこの島で、一つしかない神社に行つてみる。神社は牧場の近くにありこの島の全ての神々が集められている。神社はビローの大木にかこまれ神秘的な雰囲気漂わせている。神社の少し下でトカラキボシカミキリを1匹捕える。今日予定していた小中学校でのスライド会を明日に延期する。夜間採集は大体前日と変わらないが今晚はムシボシシロカミキリがやつて来た。

7月26日 ラジオで台風接近の報を知らせている。午前中海岸に行つたが波が荒くて釣りができそうにない。昼から学校に行き整理する。ガジュマルの木の下で子供達が熱心に木彫りをしているので仲間入りさせてもらう。子供達は皆純朴でよく恥しがり写真をとろうとするとどこかに隠れてしまう。隣の家ではもう稲刈りを始めている。稲刈りと云つても猫の類はどの如なので一口あればたいてい終つてしまう。足踏み式の脱穀機で脱穀するのであるが半分以上は白穂のようである。

夜は学校で我々の持参したスライドを子供達に見せる。子供達は最初のうちは感心して見ていたが終り頃になると眠り込んでしまう子供もあつた。この日の収穫はフタスジカンジヨコガネ、ウスイロウリハムシ、ワモンサビそれに今までのおなじみばかり。

7月27日 昼まで海岸に行き釣りをしたが波が荒いため大した収穫なし。結局全身ずぶぬれとなる。2時頃から村営牧場に行き採集したが暑くて目ぼしいものは採れない。天気は上々で100Km離れた小宝、宝の両島が水平線上にみえる。悪石島はすぐ前に迫る。糞をころがすとツマキハバビロガムシがぞくぞくと出てくる。フタモンウバタマコメツキも採集。

7月28日 昼の間はあまり活動せず。部落のまわりでカラスアゲハ、ツマグロヒヨウモン、タテハモドキヤマトジジミ、ヤエヤマトラカミキリ、

*Sympiezomias cribricollis* Konoi等を探集したのみ駐在の所に行きジャガイモとキュウリを分けてもらう夜は上地さん方からスイカをもらい半分ずつ食べる。下りの十島丸が来る予定であつたが平島沖で停泊すること。

7月29日 朝8時頃十島丸来航我々は悪石に移動する予定を変更してこの島にもう少し居ることに決定。はしけを終えて10時半頃から恵訪丸(1.5トン、千馬力)と小舟の2隻の船で島の裏側に向かう。島の男たちは

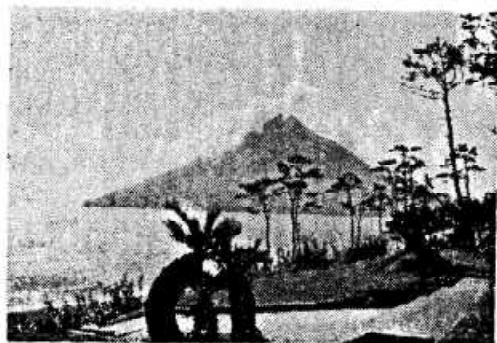
久しぶりの漁で張り切っている。今日の目的はサワラ漁とマクリ採集である。約1時間ばかり島に沿って走ると島の裏側に到着する。頂上から海岸まで黒かつ色の溶岩で覆われており頂上からは青空に向かって噴煙がぐんぐんとせり出して行く。臥蛇、才臥蛇(この島は無人島で今はウサギの天敵であると云う)中之島、口之島等が水平線上に点在している。島のウラに到着してしばらくサワラの群を追う。舟の先に一人が偽餌を流し小舟を走らせると水面にサワラが見えて来るので側に控えていたモリを持つて人がそれを突いて捕えるのである。九州あたりからのまぐろ船やかつを船が時々姿を見せる。裏側の入江のあちこちにそういった船が停泊しているのが見える。波は荒く我々の乗っている舟は木の葉の様に揺れる。船酔いでグロツキーとなりサワラを追うのを中止して乗陸する。丁度干潮時で珊瑚礁は全部姿を見せている。所々ブクブクと湯の噴出している所も見られ溶岩原から流れて来る水が滝のようになって落ちている所もある。珊瑚礁の間には巨大なウツボ、ウミガメ、色彩豊かな熱帯魚等がゆうゆうと泳いでいる。先に着いた小舟に乗っていた中学生はもう何十匹も魚を釣り上げている。島の人はマクリを採集している。ホウシヤクの類とチャバナセセリを採集しただけで網はたむ。暑さで網などふりまわすところではない。早速珊瑚礁の間で泳ぐ。

## 諏訪之瀬島

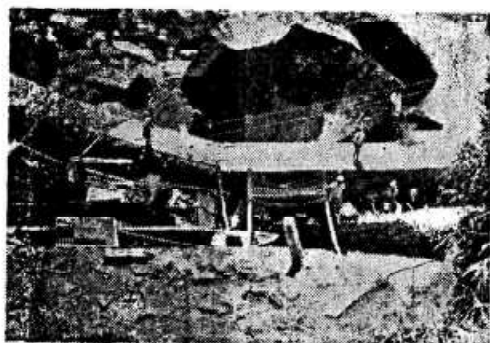


図版…諏訪之瀬島地図

- 写真 1. 開闢橋(長崎鼻より)  
 2. 諏訪之瀬島港  
 3. 諏訪之瀬島の沖にやつて来た十島丸とはしけ。平島が見えている  
 4. 諏訪之瀬島の民家。左側のカボチャの葉には赤いウリハムシ、ウスイロウリハムシ等がみられた。



写真一図



写真二図



# 悪石島



午後4時過ぎマクリ(海人草)、シヤコガイ、イセエビ、ウミガメの卵、色とりどりの魚等で船を一ぱいにして帰路につく。途中一カ所上陸して貝類を採集する。その夜はウミガメの卵、イセエビをゆでて食べる

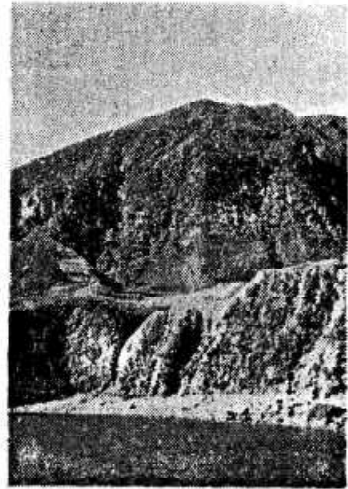
夜間採集ではトカラキイロクチキ、マグノの類が多い

7月30日昼から切石海岸に泳ぎに行く。泳ぎ疲れ釣をしたらこの島でガブと呼ばれる魚とか原色のツノギ等が釣れる。珊瑚礁の上にはいろいろの貝や動物等がうようよしている。誰も採集



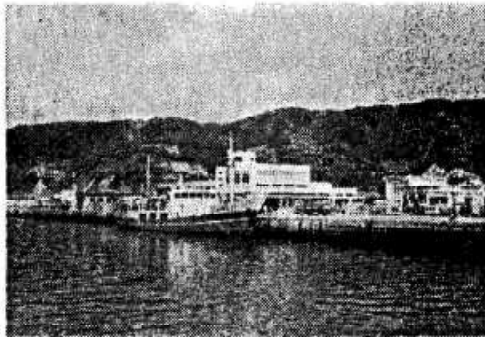
写真五図

写真六図

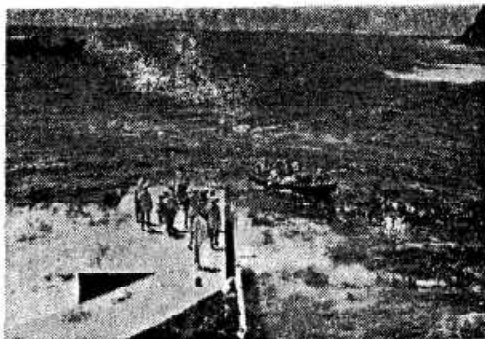


写真説明

- 5 リユウキユウクマゼミ
- 6 悪石島の御岳
- 7 奄美大島名瀬に停泊する第2十島丸



写真七図



写真三図



写真四図

する人がいないから貝はいくらでも採ることができる。昼間はムナビオアトゴミと蝶を少し採集しただけ。夜にはトカラキイロクチキがたくさんやってくる。夜間採集の後十島丸がやってくるので港に行ってみる。総勢15名程度の九州大学診療団が悪石より移動して学校に泊り込む。

7月31日 午前中は村牧場で糞虫採集を行なう。うだるような暑さの中で牛糞をひつくり返しつづく。糞の中からはツマキハバヒロガムシの他カドマルエンマクワツブエンマ、マグソコガネの類、ハネカクシ等がうようよと出てくる。牧場にはコハンミヨウ、バツタ等も多い。

午後には採集した糞虫の消毒をする。2時頃から切石海岸に釣りに行つたが岩の上を歩いていて転落。足を岩で強く打ちしばらく動けなかつたから折れたらしいと思つたがそのうちに流れる血を手拭いで止めると何とか歩けるようになったから安心する。ピッコをひきながらようやくの事で宿舎に辿り着き手当する。切石海岸の珊瑚礁の上にルーベとサングラスを忘れて来る珊瑚礁の上を歩きまわつてサンダルに穴があいたので地下足袋をやつとのことで手に入れる。

ヒゲナガヒメカミキリ等夜間採集で採る。

8月1日 負傷にて一日中静かに宿舎で寝ていることにする。昼過ぎ九州大診療団の医者と女の人が来て化膿止めの薬をくれる。悪石の現状についていろいろ話をする。それによると悪石島はここ以上にひどい島らしい。蚊やノミもここよりは多い由。

昼はアゲハを採る。夜はチャイロヒメカミキリが多く飛来。シロヘリハンミヨウも1匹やってくる。

8月2日 昼頃切石海岸に行つた所珊瑚礁の上でルーベを見つける。そこでウラナミシジミ、チャバナセセリ等採集。夜はズグロカミキリモドキ、ヒメカミキリ類を採る。トカラキイロクチキの飛来も多い。園山家に行つたところ十島丸が今度いつ来るか分らぬとのことである。台屋15号接近のためである。

8月3日 嵐の前の静けさ。上天気である。診療団は巡視船にて夕方5時頃鹿兒島に向け出発。

8月4日 台風接近の為風が強くなる。アオスジアゲハが多く見られる。

8月5日 風雨強く家がゆれるので園山家に避難する。朝のうち港の様子を見に行つた所港は大波が打ち寄せ流木が打ち上げられまるで島が飲み込まれるようであった。港からの掃りオオシマゼミ(この島でコッコゼミと呼ばれている。)を捕える。夜のふけるにつれ風雨は次第に増し家の中まで雨がふきつける。

園山家の電灯にリュウキウヒメカミキリ、トカラキイロクチキ等集まつている。

8月6日 台風は過ぎたが一日中雨。夜雷鳴を聞く活動はできず学校に行き本を読む。

8月7日 一日中うつとうしろ天気だが蝶の数が急に増えたような感じである。タテハモドキ、ツマグロヒヨウモン等がうようよとしている。花をたたくとハチがたくさん飛び出す。*Falsomordellistena takarana*(ハナノミ)1匹花より得る。

宿舎の前でギンヤンマ、ウスバキトンボが多く飛びまわっている。トカラキボシカミキリが夜やってくる。

8月8日 昨日からの宿舎の前に姿をみせていたリュウキウムラサキをついにネットに入れる。

ずいぶん破損していて台風により運ばれたと考えられる。他にアカタテハ、イチモンジセセリ、ヤマトシジミ、アオスジアゲハ、タテハモドキ等も見られる。船は今夜臥蛇沖で停泊して明朝来航とのことで園山家に泊らせてもらう。昼のうちに荷物整理をすます。明日は悪石島に行くことができそうだ。

8月9日 雨が朝から降っており港は波のため使えそうにない。切石海岸ではしけをすれば荷物を運ばなければならないがどちらになるかなかなか決まらない。船が港に見えてから船と連絡した結果切石海岸と決まり我々は荷物を持って切石に向かう。雨で坂道はよくすべる。約1時間で切石に着き丸舟で十島丸に向かう。港は大荒れなのにここは風下になるために波はあまり来ない。10時半頃ようやく乗船して切石海岸沖を出航する。島影を離れると船は波と波の谷間を進んでいるように思われる。雨は強くなり船酔いのため苦しい。12時過ぎ悪石島の沖に到着。波が荒くてはしけはなかなか出ない。船中で悪石島小中学校の水田校長と会つてこれからの宿その他についてお願いしたところ快よく引き受けて下さる。

悪石でも港が波のため使えず大きな石のころがつている海岸に上陸する。駐在さんの小屋に荷物を預け水田校長に案内されて学校のある部落までの2Kmあまりの道を歩く。夜は総代の家に挨拶に向う。盆踊りのけいこ中で青年と子供たちが我々の前で踊りを始める。

平家の落人の伝説があるだけあつてその踊りは男だけで女は影で見ている。歌もなかなか意味の難解なものである。我々の宿舎は学校の教室を借りそこに蚊屋をつつて眠ることにした。

8月10日 朝少し雨が降り一日中うつとうしい天気。学校の校庭でツマベニが飛ぶのを見たが採れない。

8月11日 10時半頃十島丸来航。諏訪之瀬での採集品を送る。港への途中でモンキアゲハ、アゲハ、カラスアゲハ、リュウキウアサギマダラ、ツマベニチョウ、リュウキウムラサキ、ヤマトシジミ等を見る。掃りに道端の枯木からオキナワウスアヤカミキリ、ナカ

シロゴマフカミキリ、ニセマツノシラホシゾウムシ等を採る。

夜オキナワノコギリクワガタ、フタスジカンショ等と共にヨコバイ、ウンカ、アマミアオドウガネが大量に集まる。

8月12日 昼から南海岸に行き魚釣り。おもしろい位いろんな魚が釣れる。海岸ですぐ焼いて食す。沖の方に小宝、宝島がかすむ。珊瑚礁に砕け散る波。照りつける太陽光線は強烈である。

やつとのことで見つけた湧水の中でトンボの幼虫を見つける。そこで安心してその水を飲んだ。

帰りに道を迷い絶壁の下でうろうろしているうちに日が暮れてしまい学校に辿り着いたのは8時頃であった。今日の昼の間に盆の行事があつたらしく我々にハンケチを記念品としてくれた。

夜学校の電灯にヒメフチトリアツバコガネ、アマミビロードコガネ等が飛来した。

校長先生と明日東海岸で魚釣りをすることを約束する。

8月13日 朝から東海岸に行き泳いだり魚釣りをする。タコ等が岩にからみついている。丁度珊瑚礁が出ていたので魚釣りには丁度適している。

真正面に諏訪之瀬島が見え左手に平島がかすむ。

東海岸は切り立つ様な絶壁が繞っており滝の様になつて水が流れていたり絶壁の途中に洞穴があつたりする。水はたいいてい硫酸を含んでいて飲むと酔つばい味のするものもある。

島の人達は潜つて大きな魚を突いてくる。赤いのや黒いの長いのやふくれたのをモリに通してかついで帰るこの海岸にはタカラガイが多い。

帰つてから校長先生の家にある風呂をたいて入る。石の上にカマを載せただけの風呂であるが満天の星を仰ぎながらの入浴も又情緒のあるものである。

8月14日 頭痛で昼まで眠る。昼から校長先生の所に行き垣根についていたモンキアゲハの蛹を2個採る。校長先生宅にはナゴラン、オオタニワタリ、ソテツ等がたくさん植えてあり花も多い。

時折ツマベニが高い木の上を飛ぶがとれない。

明日はいよいよ奄美に向け出航だ。

8月15日 昼までに荷物整理をすませ船が来るのを待つ。6時十島丸は姿を見せはしけ作業の後7時に出航する。船は次第に暗くなる海面を走り続けて夜の10

時頃小宝島の沖に停泊する。月明りの小宝島はまるで夢の中のおとぎの世界のようであり今にも海にのまれてしまふかと思われる程小さな小島である。小宝島の沖は大きな魚がよく釣れる。はしけを終えると次の宝島に向かう。

宝島もやはり月明りの中であつた。女神山が黒々とそびえ砂浜は白く光っている。工事用の自動車のヘッドライトが時折光る。船中一緒だつた宝島の校長先生が下船する。校長先生はツマベニの幼虫を飼育しているとのこと。又宝島にはツマベニが多い由。魚釣りを楽しんだり諏訪之瀬の人(船で奄美に向かう人)と話をしたりで快適な月光の中の夜は更けていき甲板の上にゴロ寝する。

海は鏡の様に静かで船は全然揺れない。

8月16日 朝奄美大島の名瀬港に十島丸は入る。

ここで岩月氏と別れ旅館に到着き久しぶりに人間らしい生活に戻る。

夕方6時出航の高千穂丸で帰る岩月氏を見送る。夜は50円也の洋画を見る。

8月17日 ツマベニを求めてバスで小湊という海岸部落まで行つたが高くて採れない。リュウキユウアサギマダラもかなり飛んでいる。道端で切り倒してある木からアオウバタマを採り気をよくする。ヒメシヤノメは内地のものより蚊が異なる。結局タテハモドキ、アオスジアゲハ、ムラサキシジミ、キチヨウ、ヤマトシジミを採集した位なものである。帰りのバスの中で小学生がツマベニとリュウキユウアサギマダラを数匹採集しているのを見る。離島での生活は腕を鈍らせるものらしい。

関西汽船で沖縄行きの切符を買いドル交換(ドルを日本円に)をする。(日本円がとぼしくなつたので宿賃が払えないため)小湊ではキノボリトカゲを1匹見る。

明日は沖縄行きの船に乗るので食料を全部処分して荷物を軽くする。

8月18日 8時30分神戸からの浮島丸に乗船する。沖縄と一緒に行動する西君と会う

台風18号の影響で波は次第に高くなつてくる。途中古仁屋、徳之島、沖永良島、与論島を経てわずかに2500トンの浮島丸は沖縄に向かう。甲板に立つと風が強しふきがかかる。船は台風の進路がそれたために翌日未明無事泊港沖に着く。

8月16日午後1時半神戸港第2突堤の関西汽船沖繩航路の集合場所に着いた。2時集合となつているのもうそこには芋の子を洗うように多くの人々が乗船を待っていた。2時半になつて乗船開始、出国カードに記入しパスポートと切符を関西汽船の係員に出し乗船名簿にチェックしてもらい、出入国管理官にサインをしてもらい税関の係官に手荷物の検査を受けた。印をリュックサックにつけてもらつてようやく乗船である諸手続を終え乗船したのが3時前であつた。そして出航までに1時間近くあつたが1歩も船室から出ることができなかつた。なぜかと言えようかつと動くと席がなくなるからである。4時10分出航、陸と船とを結んだ五色のテープは静かに切れ船は進んでいった。これで3日間陸とお別かれかと思ひ船室に戻つて隣の人と話をすると埼玉の人だつた。船客のほとんどは沖繩への帰郷者であり一部は奄美群島に行く人達であつた。6時半に船での最初の食事が運ばれて来た。焼飯のような何かわからない料理であつたが腹いっぱいとは言えないまでもおいしく食べた。

米は外米でスプーンですくうとバラ、バラと落ちる粘りのない米だつた。この食事では腹にはたらないと埼玉の大学生は食堂にかけあつてもう一皿もらつて来て食べていた。私も何かいい考えはないかと考え、おもしろい手考えたそれは食事が運ばれてくる時間が各船室まちまちなので他の船室に行つて食事をしました帰つて食べれば2度食べられると考え明日から実行しようと考えた。

夜になつても眠れず甲板に出て海を見つめている人も多く見られ2時ごろになつてもいっこう寝ようとはしないでいた。2時少しして船室に戻つて見ると、ねるところがなかつたので待つていると2~3人の人が出て行つたのでそこで寝た。

8月17日 昨夜は2時間ほどしか眠ることができなかつた。船はまだ四国沖を航行中とのことであつた。粗まつな船の朝食を終え、暇つぶしに甲板を歩きまわつたり、菓子を食べながら午前中を費やした。正午すぎ船は日南海岸の沖を航行していた。

船からは日南海岸の鬼の洗濯板等もはつきり見え、ピロー樹で有名な青島も手にとるように見えた、大隅半島の沖を航行したのがうす暗くなる前だつた。東支那海に入ると波は少し荒くなつた。左に杉で有名な屋久島がゆつくりローリングしながらかすかに視界を舞いはじめ陽は落ちていった。

明日無事名瀬で秋山さんと会えることを祈つて寝た。

8月18日 夜明けとともに左手に島影が見え、三角

形の巨岩が近づいてくる。いよいよ名瀬湾である、明るくなつて左右の赤い山肌にはポツンポツンと緑のかたまりが見える。ソテツだろう。船を降り秋山さんが来ているか見まわしたがどこにも見あたらない。しかたなく町の見物に行くことにした。町にはクロトン、ヒビスカスなどの熱帯の植物が植えられ、ヒビスカスの赤色の花がひときは目立つた。南に来たせいか曇つているのにむし暑かつた。町のみやげ物の店をのぞくとハブのショウチュウ漬とかハブの皮を売つておりいかにも奄美らしかつた。

船の中で食べるためのリンゴやその他の果物を買つて税関の荷物検査所に行つてみると秋山さんが来られておりこれで一安心と思ひ乗船し秋山さんを待たせた。秋山さんが乗船し船は名瀬を出航した。秋山さんにキヤラパンシューズ、着がえや手紙を渡してこれでひとつ肩の荷がおりたようだつた。ラジオでは台風が近づいていると知らせていたが船は古仁屋に向かつて進んでいった。

古仁屋を出て徳之島の亀徳港に行く途中波が荒くなつて、船は大きくゆれみんな船酔して青い顔になつていたが秋山さんは「こんなことはなんでもない」と言つて、いたつて元気であつた。やはりトカラ列島にわたる時小さな船でさすがこれよりはげしい波で来たえただけあると思つた。やがて食事が運ばれて来たがみんな食べようとしないのでたくさん食事が残つていたこんな時に気分が悪くなつたらたくさん食べてやるのと思ひ横目で食事をにらむ。秋山さんは二人前も食べてまだ食べれそうな顔をしているのがうらやましかつた。

夕暮れに沖永良部島に着く。そこは島の裏側にあたり少し波がおだやかで船酔もなお少し腹がすいた。沖永良部島を出航一路沖繩の泊港に向かう。

8月19日 朝4時泊港に到着、赤や青黄のネオンの輝く那覇の町が見え、夜が明けると共に沖繩の大地が目の前に見えてきた。丘の上につらなる赤い瓦に、白い漆くいで止めた沖繩独特の家が手に取るように見えた。そして税関、入国審査官などの係官が、8時半頃乗船してきた。それから税関の荷物検査が始まつた。私の所に来た係官が「君ウイスキー、タバコは持っているか」などと聞かれたりもした。一通りの検査をして印をつけてもらい、諸手続きを終えて船を降りたのが10時半であつた。沖繩上陸第一印象は紫外線が強いということであつた。ガラガラと大陽は輝きサングラスをかけないといけないと思ひリュックサックをさがしたが船中に忘れたのか見当たらなかつた。

港を出てムギワラ帽子と絵葉書を買ったが高いのか安いのか金の換算がややこしいのでわからなかった。昼なのでレストランで食事を少ししつり道具を買って私の見元引受人である森田先生の所に行くためバスに乗ったが車掌が方言で話すのでチンプンカンプンでとなりの青年に通訳をしてもらってようやく車掌の言っていることが理解できた。森田先生の自動車に乗せてもらって北部に向かう、ハイウエーに沿ったところどころに金網に囲まれた米軍の基地があり、特に加手納空軍基地は大きく金網越しに、大きな輸送機、車の上をビリビリと大気をふるわしながらジェット機が飛んで行った。カメラをむけると先生に「写真は取らない方が良い」と言われた。「前にもB52がベトナムに発進するのを写真に取った大学生がMPにしばられた」と言われたのであわててカメラをかくした。

このような広大な基地と少ない農地を見ると大きな矛盾を感じた。基地が見えなくなつてあたりは、左にエメラルド色からコバルトブルーに変化する海、白い砂浜、右側は、さとうきび畑に変わつてきた。最初の子定ではムーンビーチにキャンプするはずだったがムーンビーチを通り越し伊武部（インブ）ビーチに着いた。伊武部ビーチの入場料20セントを払いモクマオの木立の中にテントを張った。今夜の食事の準備のため秋山さんは農家に買い出しに行った。残つて米をたく準備をしていると秋山さんが帰つて来た。買って帰つて来た。買って帰つたものは鳥肉と農家でもらつた。ヒョウタンカトウガンともわからないものであつた。野菜は台風によられた関係上これしかないと言う、おかげはこれらをごちやにして作り最初のうちはおいしいと言つて食べていたがどうも食べ続けられず家から持ってきた梅干を出して食事をした。日が暮れてから蛾の採集のため水銀灯と蛍光灯のついている所に行ったが位置の低い蛍光灯の前にはあまり虫が集まつていないで高い所にある水銀灯の方に多く集まつているのである。かたつばしから取り毒びんの中に入れる。手のとどくケイコウ灯の前でカメムシを取っているとコザ市の家具屋の主人が来た「何をしているん」「昆虫採集をしているんです」「いつ本土から来たのか」「コザの方に来たら家えとまつてくれ」等いろいろ話はずんだ「北部の最北端などはまだなんだ」と言う。「だつたらこれからドライブしよう」ということになり10時すぎから伊武部ビーチを出て名護の七曲りというドライブの難所を通り名護町の入口で右の方に沖縄でただ一つのビール工場を教えてくれ舗装のない道を北上し塩屋湾に出て塩屋大橋を越せまい道を車は走り茅打ちバンタに着く。茅打ちバンタは約100メートルの高さの絶壁であると言われこの上から束ねた茅

を落すとバラバラになり飛び散つたということで茅や打ちバンタという名前が出たというが何しろ暗らいで実際にどんな絶壁かわからなかつたが波の音だけはよく聞えた。次に沖縄の最北端の辺上（ヘド）岬に向かう。辺上岬からは近くて遠い本土の与論島の灯台の火が見えた。辺上岬をあとにして塩屋大橋に帰りそこで夜の明けのを待った。

8月20日 夜明けと共に塩屋大橋を出発、本部半島の方の見学に向かう。道路にはタニシの親玉のような食料のカタツムリがたくさん出て来ていて自動車にひかれグシャグシャと音を立てて死んでいった。車の左手には瀬戸内海ににている、島の多い屋我地湾である海の正面には屋我地島が大きくおおいかぶさるように浮かび、その間に小さな岩礁があつちこつちであり、海というよりむしろ湖のような感じであつた。右手の山肌には濃い緑のトゲトゲしい葉のパインの畑が見えた。このあたりは沖縄のパインの主要産地で大体どこえいつてもパインがある。やがて今帰仁村（ナキシリン）に入り今帰仁城跡を見学に行く、石の城門や石垣が残つており、石段を上つた本丸陸からは海の方の伊是名、その他の島が見わたせた。

この城は沖縄の戦国時代にもなかなか落城しなかつたと教えてくださつた。ここで沖縄に来て初めてパインを食べた。値段は15セントで本土で食べるパインとはくらべようのない味だつた。今帰仁をあとにして、本部の方に行くために琉球松のしげる山岳地に入る、山はだには石灰岩が露出しており、セメント工場もあるそうだ。車は山岳地を下り右にアダンの林のつづく海岸線に出て道路の右左に沖縄独特の家のような墓などを見ながら伊武部ビーチに帰つたのが昼前だつた。帰つてすぐに例のごとく採集に出かけた。海岸に生えている名も知れぬ花には、アオスジコシブトハナバチタテハモドキ、その他の昆虫が集まつておりかたつばしから採集した。正午すぎテントをたたんで名護に向かう。名護には旅館と飲食店をやつている友人がいるのである。名護までバスで行きそこからタクシーで友人の家に向かう。着くときつそく「パインアップルはまだ食べていないでしょう」とパインアップルを料理したのを出してくれた。そして昨年の北海道の話や静岡の方に実習に行った時の写真などを見せてもらっていると町営グラウンドに佐藤総理が来るとかいつて、皆んな日の丸の小旗を持つて迎えに行つていた。「佐藤さんは私たちの行く方にばかり行くじやないか」と秋山さんと笑い話した。今夜は名護ビーチでキャンプするため名護ビーチに向かつた夜食のしたくとして今日は私が買い出しに出かけたが、八百屋に行つても野菜はジャガイモとタマネギだけなのでタマゴとかんづめを買つ

て帰った。夕方友人がテントに来て学校を案内すると言うので出かけた。学校は農業学校なので色々な植物が植えてありこれは採集するのに都合が良いと思つた友人に色々世話になつたので1ドル銀貨をプレゼントした。この1ドル銀貨は那覇に行くと4ドルぐらいで売っているそうである。名護ビーチの夜は少し涼しく毛布一枚では少し寒かつた。

8月21日 朝起きて木立を見つめていると、何か紙のような物が飛んで来るではないか、よく見るとオオゴマダラである本土ではこんな飛び方をする蝶は見たことがない、あわてて網を出して追つたが捕えることはできなかつた残念である。そして北部農林高校の農場に採集に出かけた。このヒビスカスの花に群がっているシロオビアゲハを二頭ほど捕えた。あたりにはキチョウなども飛んでおり、名前のわからない白い花にはオオゴマダラ、リュウキウアサギマダラなどが群がっていて容易に取ることができ捕まえて羽のいたんでいるのは逃したりしてオオゴマダラ、リュウキウアサギマダラをたくさん取つた。オキナワベツコウトンボ、アオシヤゲハ等ここでは以外と収穫があつた。

この先生と色々話していると昼が来た。沖縄のソバは食べたことがないので連れていつてもらい食べた。沖縄のソバは本土とちがつて丁度ウドンのような太さで大変おいしかつた。また沖縄の酒についてどんなものかとたづねると学校にあるから飲んでみないかと言つたが未青年だからと言つてやめた。自分のことを18才のにてつきり20才をすぎた大学生と思つたらしかつた。私はそんなにふけて見えるのかと残念に思つた。午後名護城(ナングスク)のあたりに採集に出かけた。

山の方はあたり一面バイン畑で黄色くうれたバインがたくさんあり少しぐらい失敬してもわからないようであつた。その夜コザの家具屋の主人が家にとめてくれるというのでコザに向かう。コザに着くとパー、キャバレーのネオンが美しくつき、まるでアメリカにも来ているようであつた。

その夜は家を出て初めてたたみの上で寝ることができ、今までのつかれをいやしてくれたようだつた。

8月22日 今日には沖縄には多くの鐘乳洞があるというので有名なものの一つ金武(キン)の鐘乳洞を見学に向かう。観音寺の右側の方に入口があり入場料は10セントで入口の近くの穴には無数のシダ類がたれさがりヤシの木も生え不気味な静けさである。内部には、さまざまな鐘乳石などがあり、暑い外気とちがつて冷気を感じる。外に出て採集したが目ぼしいものは見あたらずシロオビアゲハなどの普通種ばかりであつた。

観音寺の横の大きな木の間に操道だと土地の人が言つていたが、いつこうに珍種らしきものは飛んでこな

かつたので、うらの森の方に行つて見ることにした。

そこで秋山さんはコノマチヨウを見つけたとか言つてさかんに追かけまわしていた。私はここでミスジチョウを採集、下の方の畑のそばの木立に何かいそうだと入つたがいたのはヤブ蚊だけであつた。まだ奥の方に道があるというので秋山さんが出かけていつたが墓があつただけだと言つて蚊にさされカユイカユイと言つて出て来た。金武をあとにしてコザに帰る道すじに以外とPAWNSHOP(質屋)多く特に基地のまわりなどは、コザに帰り昼食をとり家具屋の主人に礼を言つて南部の大里村に向かう。着いたのは日も暮れて暗くなつていたころだつた。やつとのことで森田先生の家に着き夢路についた。

8月23日 先島諸島の石垣島に向かうために泊港に行つたがこの日船は出ないそうで前に聞いた話とはちがつているのである。明日の3時に出航することだつた。先生と今日は南部の戦跡を見に行くことにした。途中で製糖工場を見学に行つたが今は季節でないで機械だけ見たが、砂糖きびがここに集まつたらさぞかし雄大だろうと思つた。聞くところによれば砂糖きびはすてる場所がないそうだ。しぼつたカスは板などに合成するのである。南部は沖縄戦でもつとも多くの犠牲者を出した地区である最初私達は姫百合之塔をおとずれた。先生の話を知っていると何だか胸がしめつけられるようであつた。とくに日本軍終末の地摩文仁岳一帯は死傷者が文字通り山のごとく重なりあつていと話してくれた。摩文仁岳の頂上には各県の慰霊の塔が無数に立ちならびちようど岡山の塔も建立されかけていた。ここは悪く言えばまるで慰霊塔の展示会のようであつた。このあたりは全体が戦跡で戦争の傷跡はいたるところにあつた。たとえばバク撃などによつて形の変つた不自然な山、大きな木は一本もなく、一家が戦争によつて全滅した家の跡、いたけない女子学生や師範学校の生徒が殺されたという壕の壁に残る無数の火炎放射器で溶けた跡、などいろいろ聞かされると戦争を知らない私ではあるが戦争に対するにくしみと恐しさをつくづく感じた。摩文仁をあとにしてレーダーに囲まれたミサイル基地の前を通り与那原町に入る。

そこで私たちは海水浴をし、先生は自動車の修理に出かけた。帰つて来るなりやつてきた「よくここにいることがわかつたね」と聞いたら「君は色が白いからどこにいてもわかる」と言われた、秋山さんはさすがトカラ列島でやいて来ただけあつて沖縄の人とあまり変わらない。海水浴を終え先生の家に帰る。

私は例のごとく採集に出かける。ここでは交尾している蛾などと、青色に光るカメムシ、ハムシなどを採

集した。その夜は早く寝床にはいりイヤモリの鳴き声を聞きながら寝た。

8月24日 朝沖縄からの第一回の昆虫館へ採集品を送る準備をした。箱から出して見ると蝶、トンボの一部がいきをふき返して足を動かしていたのもう一度殺しなおして荷作りをした。箱は紙なのでつぶれてはしないかまた税関が開いて見て生きかえつていたらと心配しながら東風平(コチンダ)の郵便局に持って行き航空便で送った。そこで国連創立20年記念の切手を買ひ、一度先生の家に帰り大里公園に行く。大里公園から望める風景はすばらしく眼下に、明るく南国の陽に輝く穏かな海面の入江が見えた「ここは港には大変いいんじゃないですか」と聞くと、この入江は浅く戦後このあたりを取り囲んでいた米軍の艦艇が台風をさけてこの入江に入ったそうであるがこの入江は浅いので暗礁に船を乗り上げたり互いにぶつかつたりして多くの船がしずんだそう。つい昨年までここにはその船の残骸があつたとか。この光景を見た日本軍の捕虜は神風だといつてよろこんだそうである。ずっと眺めていると沖縄の端と端が見え沖縄はこんなにせまいのかとびつくりした。大里公園を下り泊港に行き先生と別れたそこでは3時に船が出航すると言っていたのに6時に遅れると言ひ船の時間のたよりなさをつくづく感じた。時間があるので国際通りの見物に出かけたそこには無数の貴金商店、時計店が立ちならび、その商品は本土より3割〜4割ぐらい安く日本製のセイコーの時計などは本土での半分の価格で買うことができる。いろいろ見て時間が来たので泊港に帰り乗船する。中で神戸からいつしよだつた埼玉県の人と再会しいろいろ話をし、船室の自分の席をとつた所に行くと女子中学生が3〜4人すわつており、どいてくれともいえずしかたなく今晩は甲板の上で寝ることにした。

8月25日 朝5時頃目をさますと頭がずきずき痛み寒むけがしてきた、かぜを引いたのである。まさかこんな南国でかぜを引くとは思つていなかったのもその方の準備はしておらずクリスマスは石垣で買うことにして甲板ではとつても寒いので船室に入りちょうど秋山さんが寝ているそばに少しすき間があつたのでそこにもぐり込みもう一度寝なおし7時半頃に起きた。朝食を自分の荷物のある中学生のそばで食べ、石垣のことについて話し、昆虫はめずらしいものがあるかと、たずねると小さい頃はたくさんいたが本土の人が多く採りに来て少なくなつているといった。

これは私たちにとつて手痛い発言だつた。甲板に上つて見ると、すみ切つた青空とコバルトブルーの海の中を船は進んでいた。船のそばでトビウオが1匹、2匹と飛んで水の輪を作つていた。やがて石垣島が見えて

来た。石垣の港の近くに来た時海を見ると、コバルトブルー、エメラルド白、茶の縮模様海である。船からでも魚が泳いでいるのが手に取るように見え、やがて接岸、サンゴのかけらでできている白い港の広場を通りぬけ市内に入る。市内と言つても島全体が市である、オンボロバスで伊原(間イバルマ)に向かう伊原間は石垣島でいちばん幅のせまいところで、幅300メートルぐらいで小さい船はかついで越すと言つていた。

中学校の教室を貸りそこに泊まることにした。場所がさまつたら例のごとく網を持って採集だ、木立の中の白い花にリュウキウアサギマダラ、オオゴマダラはなバチの顔が群がっており割合簡単に捕ることができた、そして私と秋山さんはめいめい夕食の買出しに出かけた、私は海岸線のジャングルの中を採集しながらパイナップルにパイナップルを買ひに行つたがジャングルの中に足を踏み入れると中でで落葉が、がさがさと音をたてるので一しめんハブかと足をとめて見つめると野ねずみだつたので、やれやれと思つた。

もしもハブでありかまれていたら15分であの世行きであるそう。またそうかと思うと目の前を緑色のトカゲが出てき余り良い気分ではなかつた。

そしてパイナップルに着き農家の人がパイナップルの値付をしており、そこえ行き事情を話すと、よく熟しているのは取つてしまつてないといひながら12個ほど取つてくれ2個ほどその場で切つて食べたさせてくれ、パイナップルが食べて見たいとか、沖縄のバナナはしぶかつたなどを話すと明日ここに来なさい家によく熟したバナナがあるから持つて来るといひ、パイナップルを10個ほど肥料袋に入れてただでくれた。その帰り道で会つた土地の人と色々話したりしていると家によつて茶でも飲んでくれといつてくれるので、その家におじやまし、この近くのことをいろいろ話してくれた。

その家はまだ宮古島から移民してきて間がないので家といえはわらぶきのみすばらしい家であつたが、わざわざ菓子などを買つて来てへれ、ここではつくづく沖縄の人の素朴な親切を感じた。

学校に帰ると秋山さんもパイナップルをもらつて来て皮をむいていたのでそれを食べたりしたので夕食はあまりほしくはなかつた。

8月26日 朝食はほしくないでパイナップルを2個ほど切つて朝食のかわりとしたが腹のぐあいがどうも悪かつた。前日農家の人と約束したパイナップルとバナナをもらひに行つたが何とバナナを30本あまりも持つて来ており、パイナップルはなかつたので種子を持つて来てくれた。バナナを食べて下さいと云つたがパイナップルを食べて腹ぐあいが悪く、これにバナナを食べると下痢をするのではないか心配だと云うと、ここではバナナは下痢

止めの果物だと云つたので7本ほど食べた。残りを持って帰つたらと云つたが何しろ石垣の町に行く途中なので荷になると云いことわり石垣に行くバスの停留所に急いで行つた。その時、すでに遅くバスは出てしまつていたので次の停留所まで歩くことにした。歩きながら目ぼしいものはないかそのあたりを採集した。のどがかわくと畑からサトウキビを失敬してかじりながらあるき次の停留所に着いた。またのどがかわいたので近くの民家に水を飲ましてもらいに行くところでお茶などを出してくれ、ここでまた親切さをつくづく感じた。

バスに乗り石垣に向かう、石垣に着いて琉球海運に行き切符の予約をし28日に取りに行くことになった。用事を終えたがあいにくバスがなく琉米文化センターなどで時間を費やし、伊原間に帰つたのは夕方だった。今夜は秋山さんと先生がつりに出かけたというので懐中電灯を持って足元をてらしへびに用心をしながら海岸の方につき道具を持って行つた。

なぜ足元をてらすかといえばへびを踏まない用心のためである。やつとのことで秋山さんの所に行き釣りはじめたがさつぱり釣れず釣り糸を手を持ったままねてしまった。数10分たつてつれないから帰ろうと起してくれ畑校し秋山さんが切つたサシミと魚の塩だきにしたものを食べた。秋山さんは家が魚屋だけあつて料理が上手である、その味はなんとわすれがたいほどおいしく、今までこんなに食事がうまいと思つたことはない

8月27日 朝食は昨夜の魚の塩だきに、したつつみをうつつた。フルーツとして秋山さんが子供たちといつしよに取つて来たバンジウロウという果物を食べた。それは非常に風味がよくおいしかった。まだ取れば海岸を上つたところにくらでもあるそうだ。ここで沖縄の酒はどんなものだろうかとの好奇心から泡盛を15セントで2合ほど買って来て湯のみ3分の2ぐらい飲んだところ、味は日本酒のようなウイスキーのような変な味であつた。のみほしてしばらくすると体が燃えるようになつくなり、立ちあがるとふらふらとしまともに歩くことができなかつた。これが酒に酔つた時の気分かなと思ひ酔いのさめた頃、ここに鍾乳洞があるというので学校を出発した。途中民家の庭先には必ずと言つていいほどパイヤの木が2~3本植えてありマクワウリぐらいの大きさの緑色の実が無数になつていた。

やがて暗く大きな口をあけた洞穴の入口に來た。まわりには小さなヤシ類をはじめガジュマル、シダ類がおいしげつていた。中に入つて行くところコウモリなどがばたばたと飛びまわつたりして、白いキャブ

ラの光で見る鍾乳石は何んともいいがたい美しさである。岩場を上つたり下つたりしていると秋山さんが何か見つけた、ヤシガニである、それを捕え奥に進んでいると突然、秋山さんがスルスと5メートルぐらいすべり落ちた。さいわいけがはなかつたがカメラ、ズボンほどろだらけである、さらにおくえと進み少し光がもれているところがあつたので出口とばかり行つたがその場所には海水が入つており出ることができずそこにはエビがバンヤバンヤと音をたてていた。かならずこのあたりに出口はあるとさがした結果上の方にやつと出口があつた。外に出ると下はすぐ海である。その洞穴を出たあたりにはオオタニワタリ、ハブカズラ、ホヤ、玉シダが生えていた。

海に入り海岸線も歩いていくとたこの足のよな根が出ているマングローブの林に出た、そこを通り砂糖きび畑を通り帰る。今晚のキャンプ地川平(カビラ)に向かう準備をし、たくさんあるバインをどのように減すかと考え、とりあえずカンズメのように砂糖を入れて食べることになつた。こうして食べると今までバインでげつそりしていたがげつこころ食べることができた。

教室をかたづけバインの皮に集まつている虫を捕えろと、川平に向けて出発した。川平では交番の横の広場にテントを張つた。その夜私は電柱の電灯と交番の電灯を往復してそこに集まる昆虫をかたづけしから採集した。ここでの収穫は蛾類、カメムシ、コガネムシ類がたくさん取れた。テントに帰つて見ると秋山さんが海岸で大きなヤシガニを見つけたとサシミ包丁をサオのさきにつけて出かけるころであつたので、いつしよに海岸にいつたが捕えることはできなかつた。

8月28日 切符を買いに石垣に行くために、バスに乗る。バスは川平公園の琉球松の林を通り一面バイン畑のところに来たが、伊原間でバインを食いすぎてたんのうしたためか黄色く熟したバインを見るたびに気分が悪くなるが島の半分がバイン畑と聞いてやれやれと思つた。ここではバインは5セントぐらいで売つており、クスリを使用して開花促進、肥大促進をやつていようである。石垣に着き直射光線の強い外で2時間ほどならんで本島に帰る切符を買つたが、東京の人に今夜10時に与那国行きの船が出ると聞いてこれは一大事と秋山さんに知らせなければならぬとバス乗り場に行つたがあいにくバスはなく琉米文化センターに行きそこで石垣の民芸品だとかここで取れるコノハチヨウイシガキチヨウの標本50種を見たりして時間を費やした。

川平に帰りそのことを秋山さんに知らせた、彼はてつきり29日に出るものとぼがり思つていた。最終のバ



スで石垣に向かう、ここで別れることになったが、今夜別れると思っていなかつたため宿がないので岡山大学卒業で教員をしている大浜先生のところにおしかり泊めてもらうことにした。旅行に行くところも図々しくなるのかと思ひ先生の家に行つた。

そこで昆虫採集その他についておもしろい話を聞いたので紹介しておきます。石垣にはコノハチヨウという蝶がいるがこの蝶の採集について話してくれた。それはコノハチヨウはきれいな山の谷川みたいなところ、その付近の雑木林にいてそれを捕えるのには最初谷川のあたりの草に神繩の酒泡盛を口にふくんで草にかけて後付近の雑木林をほうなどでたいてコノハチヨウを追い出し泡盛をかけた草に近づかせるわけであるが、チヨウは酒のにおいにつられて酒の露を吸い酔つて動きがぶくなくなつたところを手でつかまえるのである。またオオゴマダラという蝶がいるがその蝶は別名バカ蝶とよばれこれを捕えるのには飛んでいるところに砂をなげて、羽の上に砂がつてその重みで下に降りたところを手でつかまえる方法で網は全々使用しないそうである。

またヨナグニサンは神繩本島、石ガキ島にもいるがそれは人間が与那国からまゆを持ち帰つたものがかえり増えたという人為的なものではないかと、うそかほんとか知らないけどこの町のみやげ店で蝶の標本を売つていたので、その一部の価格を参考までに紹介しておきます。オオゴマダラ20セント、コノハチヨウ20セント、リュウキユウアサギマダラ10セント、インガキチヨウ15セントとなつており、またヨナグニサンのマユで作つたサイフなども売つていた。

8月29日 午前中市内を見物するために先生の弟さんと一緒に町に出る、石垣はその名のとおり赤茶けたサンゴ礁の石を積み重ねた石垣がたくさんある、ここは戦災を受けなかつた関係から古い神繩の姿がそのまま残つていた。その例をあげると宮良殿内（ミヤラドンチ）という神繩最古の武家屋敷とか権現堂などである。変わつているのは宮良殿内では当主が見学者に記帳をさせることである。見物を終え戻らなつたので神繩ソバを食べに行く、神繩のソバはいつ食べても大変おいしい。

こうして大浜先生の家を去つて那覇に帰るために港に行く、午後2時10分船は石垣をあとにして那覇に向け出航した、これから20時間の船旅である。船は詩の島、歌の島とられ、昔ながらの神繩の姿をとどめている石垣島を横に前方には石炭があり時には野ブタも出るという西表島（インオモテ）をあとにして船は進んだ。

8月30日 朝9時頃に泊港についた、今日は秋山さ

んと別れて2日目、写真を取るため南部戦跡めぐりの定期観光バスの切符を買いに昭和観光まで行き70セントの料金を払い観光バスに乗り、南部戦跡に向かう最初は波之上宮だそこの鳥居には今も銃弾のあとらしきものが無数に残つていた、バスは糸満町に入る、ここは漁業の町であり、ここでおもしろいのは夫婦別々の財産制である。夫が海で魚を取つて来たのを嫁めさんが買ひ嫁さんがそれを売つて利益をえるということである。この場合嫁めさんが夫より金持であるということがあり。現在ではだんだんこのような風習はなくなりつつあり、このようなことは夫が海で遭難した場合あとの生活にこまらぬようという用心のためだとガイド嬢が説明してくれた、次に赤比儀殿、幸地殿門中墓（コウチバルモンチユウノハカ）門中とは同一親類のことで門中の人員も4,700余名という多人数であり、この両家の墓は270年前に創建され、奥の方にあつた一基は親墓（トウシ）、前方にある4つの墓は子墓（シルジヒラシ）と言ひ、これにはきまりがあつて、7才未満で早死した者、一門の名誉を傷つける行為をした者はこの墓にまつることが許されないとのことである。

糸満から摩文仁にかけて約30分は墓標の島への道だわずか10キロたらずの道の周囲には、実に100を越す慰霊塔が立ちならびその一部をガイド嬢が説明してくれる。このあたりに来るとガイド嬢が泣きだすと前に乗つた東京の人がいつていたが、このバスガイドはいつころに泣かないで、姫百合之塔に来たらガイド嬢の説明でおばさん連中や女の子がハンカチを出して泣きだすのである。米軍に包囲された女子学生は全員制服に着がえて校歌を歌つて、学業なかばにして散つていつた女学生の壮烈な最期をとげた話を聞くともなんだか泣きそうになるつたが表に出して泣くのはかつころが悪いので心の中で静かに泣いた。

こうやつて慰霊塔ばかり見ていると死者の行列を見るようである。こうして涙をさそう戦跡めぐりをおえ車は具志頭（グシチヤン）村を通り与那原（ヨナバル）に帰り4時間半のバスの観光を終わり那覇に帰る。今夜は森田先生の家に泊めてもらうことにした。

8月31日 ここで朝からずつと採集したが何しろさおを秋山さんに貸したためさおがないので網が使えず手で取ることでできる昆虫採集した。昼の食事のおかずにはブタ肉が出た。神繩に来て民家にとめてもらうとかならずブタ肉を料理したものが出ると食ぜんを見るとおかずはブタ肉ばかりである。こうブタ肉のような油こいものばかり食べていると胃の方がおかしくあまり食べなくなかつたせいか何どもあげそうになつたが出してくれるものは残してはいけぬと無理して食べ

ることがしばしばだった。こうやついているとみそ汁のようなあつさりしたものがなつかしく思えた。沖縄では野菜が少なくヘチマ、トウガン、ヒョウタンに似たものしか食べることができなかった。

9月1日 今日は帰る準備のため那覇に行くそこで鹿児島までの船の切符を買い、みやげを買いに国際通りに出かけたが、何しろ色々あるので目うつりしてどれを買おうかと迷い結局、琉球漆器のかべかけと、琉球菓子、泡盛などを買った。そして首里の方に行き、守礼之間とか首里城趾、首里博物館を見学し今夜は市内のユースホテルに泊まることにした。そこには大阪、東京の大学生が5~6人泊っていた。その人達と夜、万年筆などを買いに出かけた、国際通りの大洋堂という時計店に入った。その主人は同志社大学のひいきで同志社の者だと2割ぐらい安くしてくれるというので同志社の大学生といつしよに私も同志社の学生のふりをして店に入った。

そこではコココーラなども出してくれ大変なサービスぶりでも私も買う気はなかつたのだけれどついボールペン二本を買ってしまった。他の人は時計や万年筆、ガスライターをそれぞれ買った。ユースホテルに帰り沖縄に来て初めて最後の風呂に入った。ぬるいので湯を出しているとだんだん水に変わり風呂は水風呂になつてしまった。

9月2日 いよいよ沖縄とも最後である。12時に船が出ると言うので12時前に港に行くと、船は3時まで遅れて出航とのことであることでも船の時間は遅れることになつているとつくづく思った。琉球政府とか町の中をブラブラして時間を費やし2時に港に荷物荷物の検査を受ける。未青年なのに泡盛という酒を持っていたので見つかると没収されおまけに罰金を取られるから大学生にたのんでそれを持って検査を受けてもらうことにした。検査を終え船に乗り込む。突堤にはたくさんの人が見送りに来ていてみんな送る人の五色のテープをしっかりと持っていたが私にはあいにく指輪がないのである。ここで大阪の大学生にテープをもらつてその人のガールフレンドに投げて持つてもらった。

やがて船はテープを切つて沖え向つたが中には名残りおいしい人か、図々しい奴かしらないけれどセロハンと紙で出来た長くなかなか切れないひもを持つてみんなのテープが切れてしまつても一人だけいつまでも突堤とつないだ人がいた。よつほど名残りおいしいのだろうか。こうして沖縄の大地は目の前から見えさうとしているが、頭の中にはまばゆいばかりの太陽に照らし出されるコバルトブルーの海、真青にひろがる大空山腹につらなるパイン畑、島を真赤に色どるヒビスカ

スの花、緑深いアダムの林、美しく飛びかう熱帯の蝶海岸線につづくソテツヤシダの群落、美しく素朴な人間性、沖縄での思い出は永久に忘れることはないであろう。

9月3日 いよいよ本土に近づいた。白い煙を上げる硫黄島をすぎ右に薩摩富士の開聞岳、左に佐多岬をながめながら鹿児島湾に入った。眼前に噴煙をあげる桜島が見えて来た。やつと本土に着いたのである。検エキを終え税関の検査が始まつた。この検査は今までの検査よりきびしく、スーツケースなどに入れている持物をみな出さして調べたり、特に皮製品、時計、ゆびわなどは包装しているのを破つて検査し、サイフの金や、領収証なども調べるといふきびしきであつた。私は未成年ということがさいわいしたのか他の者よりはきびしく調べなかつた。

そして船を降り倉敷へ帰路についた。最後に沖縄の採集はスケジュール、その他で忙しく一方所にとどまつてゆつくり採集することはできなかった。また採集品も蝶類、蛾類、カメムシ類、トンボ類がほとんどで甲虫類は季節的に遅かつた関係かあまり取ることができなかった。それにしてもすばらしい旅行であつたといまさらながら思うのである。

## —おとしぶみ—

### 大山産甲虫二題

#### 1. シロモントグトグゾウムシ

*Colobodes matsumurai* Kōno

「原色昆虫大図鑑Ⅱ」(北隆館)によれば本種は北海道に産し本州からは知られていないようであるが、筆者は1965年7月4日、鳥取県大山にて一頭を採集したので報告する。

#### 2. エゾツヤハダコメツキ

*Yukara inornata* Lewis

本種も北海道から知られる種であるが、筆者は取鳥県大山にて、1957年7月10日一頭を採集していた。同定していただいた岸井尚氏に感謝する次第である。

(水野弘造)

## ギフチョウの幻想

松野 宏

数年前の春、ある晴れた朝に児島市の福南山の付近を車で通ると、前方の路上をフラフラと黄と黒の斑の蝶が横切つて行つた。時期もよし、アゲハにしては小型のその蝶を見て、すつかりギフチョウだと思つた私は、久方振りに春の感触を味つた気持で、その日一日朗らかだつたものである。

所がその後、倉敷昆虫館で重井先生にお聞きした所岡山県下ではギフチョウは県北にしか記録がない、との事である。

さて、そうなると私も放つて置く訳にも行かない。

既に夏になつていたが、食草のカンアオイを探しに出掛けた。そして付近一帯を文字通り草の根を分けて探したが見付からない。逆にこの付近特に谷間の低い所は、私が今までギフチョウを採つた経験のある場所とは植生が大分違つている事が分つた。

これでギフチョウの棲息は先ず絶望となつたが、それでも翌年の春、再びネットを持って行つて見た。同じ4月上旬だつたが、アゲハの小型な個体を2回ほど目撃した。児島の市街地付近ではまだ見付けない時期である。

どうやら前年のギフチョウの正体は、その分布をよく知らなかつた私が、このアゲハのミはしりミを見誤つたものらしく、春の陽に浮かされた私の幻想だつたと云う事になつてしまつた。それにしても、長らくギフチョウを見なかつたとは云え、アゲハを間違えるとは我ながら情無い話だが。

然し、何故ギフチョウは岡山県南部にはいないのか？

同じ瀬戸内沿岸でも広島、山口県下には棲息する山口県柳井市では私も採集した事があるが、特別自然相の豊かな所でも無い。

私は空想はこの辺から初るま。

× × ×

私は山陽本線は度々往復した事がある。沿線の所謂白砂青松の美しい風景も、私にフォーナの貧困を示すだけとしか思えないのだが、何度か旅行する内に、同じ瀬戸内でも東と西では微妙に自然景観が違ふ事が分つて来た。

つまり、岡山近郊では丘陵性の山と比較的広い沖積平野が多く、少し高い山もその頂上部は傾斜がおだやかで、大体に円い感じがする。

これに対して西の方に行くとも高く、山腹の傾斜は山頂付近で急になり、山のシルエットは鋭くなる。特に広島から西は山が若干険しくなる。

また、山の植生も東部では特に貧弱な感じだ。

両方の境界は尾道の付近にあるらしい。これは瀬戸内海の島々も、この辺から西に大きい島が多い事とも対応しているものだろう。

更にこの風景の両側を見ると、東部は姫路の東側の風景が変わり、加古川線の沿線では台地状の地形が広がっている。また西へ行くと、小郡付近で高い山は無くなつて低い丘が複雑に続く地形となり北九州の延長である事を思わせる。

さて、山陽地方のギフチョウの産地を地図上に記して行くと、およそ上に挙げた景観の変わり目で居る、居ないが変る事に気付いたのである。

「日本産葉類分布表」によると、東では兵庫県のみ三田、武田尾付近の所謂北摂山地に分布し、三木町にも記録があるが、それから山へ岡山県東部は空白地帯である。そして更に西へ行くと、先ず福山尾道間の南側旧山南村をはじめ尾道周辺から採集されており、呉、広島付近には産地が多い。山口県へ入ると柳井市、光市から知られており、山口市の記録が現在の所分布の西端と云う事になつている。

即ち、私の感じた景観の相違に根拠があるとすればギフチョウの分布との間に次のような対応関係がある事になる。

風景境界	小郡	尾道	姫路
ギフチョウの分布	×	○	×

それにしても、列車の窓から見た感じだけではおよそ科学的でない。この景観（風景）の相違とは何に原因するものであるか。

恐らく、地質地形などの条件の上に、気象や植物相などの他の自然条件が加わり、更に開墾や伐採などの人為的条件も複雑に絡み合つた結果を眺めている、と云えるであろう。

そうすると、生物の分布もこれらの各要素に規制され、影響を受けているのであり、その意味では景色と分布の間に相関々係があつても不思議ではなさそうだそこで裏付けをすべく、手近かな資料から調べ出したのだが、どうも今まで見た限りでは、明快な回答が出て来ないのである。

地質的にも山陽地方の東西に根本的な区別は無いらしい。地形区分でも、瀬戸内の真中から分けたりしていない（もつとも、この地形区分図と云うのは仲々面

白いもので、分布を考える上から別の点で私に興味を起させたが)。

地史的には、瀬戸内海の成立までの経緯は相当複雑なものらしいが、私などの俄かに論じ得る所ではなくただ、気象図の、年雨量1200ミリ以下の地域が、姫路付近から尾道付近までの瀬戸内沿岸で、丁度空白地帯と一致する事が分つただけである。

結局、山陽地方東部では西部に比し山が比較的平坦なため(少くとも鉄道の沿線では)耕地化が進み、少雨量の上に度重なる伐採に会つては山林も育たず、現在の風景となつた、と云う程度に考えて、下手な理屈はつけない方が無難と思われる。

それにしても雨量1200ミリ以下と云う点はギフチョウの蛹が特に乾燥に弱い事を思うと偶然では無いような気もするが、これだけでは勿論何とも言えない事である。

どうも、この論議も非科学的幻想の域を出る事は出来なかつたようだ。

× × ×

## ドクトル・ザーメン採集回顧録 (8)

青帽組 赤帽組 活躍す

黒坂にウスバシロチョウを追う

ドクトル・ザーメン

5月23日 1965年度第1回の採集会である。不肖ドクトル・ザーメンこと、2年目ごとの幹事改選で初当選の栄誉に輝き、新調した青帽子をまとつてのあふれるばかりの張り切りようであつた。

※新しい昆虫採集※(下巻)京浜昆虫同好会編に

黒坂付近などウスバシロチョウをはじめ種々の昆虫が大山顔負けのほど多産し、駅前で採集できる。

広々とあり、三角ケース2個をバンドに結び、毒びんを服の両ポケットに2本ずつしのばせ、捕虫網の余備もぬかりなく万全の態勢でかけた。ウスバシロチョウの標本、図版はいやというほど見てきたが、生きて飛んでいるお姿はまだ拝んだことはないとあつては生物学者ドクトル・ザーメンのけんにもかかわる。

*Parnassius* の名の通り陽ごとともに若々しい美しさ象徴、処女の舞うが如き清楚な優雅な姿を描きつつ黒坂駅に第一番に降り立つたのもドクトルであれば、イの一番で小急ぎに採集目標地の茗荷峠方面に歩を運び出したのもまた青帽ザーメン氏であつた。

駅から100mほどのところ群がつかつて奇妙な飛び方をしている最初の獲物を発見した。すーと上に舞い上が

さて、私は以前、柳井市でギフチョウを採集した事は前にも述べた(その内の2匹は倉敷昆虫館に出陳してある)。然し残念乍ら詳しい事は何も調べていない有様である。

その後同市を訪れる事もあつたが、山を歩く事は無く、何の変哲もない松の疎林の中に現われ、ミツバツツジや時には島のダイコンの花などにも来ていたこの蝶を見た事はない。然し、山の伐採跡が転がるのを見るにつけ、まだギフチョウは無事だろうか、と思わずにはいられない。

私も机上の空論はよい加減にして、次に行く機会があつたら、せめて食草の正確な種名だけでも明らかにしておこうと思つている。

また同市の沖には相当大きな島が多く、原始林に近い山を残している島もある。これらの島にもギフチョウが分布する可能性も絶無では無いと思うのだが、調査に出掛けるヒマなど、今の私には望むべくもない事である。

り、それから滑走するように舞い降り、天から目に見える糸であやつられている、あやつり人形、こそましくカゲロウの類と見た。これぞドクトルの専門である。数種類が群飛しているとはまさにとんで火に入る夏の虫、夢中でとつて三角紙に入れる。ひとつ紙に一匹ずつ入れていたのでは間に合わない。二匹ずつ入れてみたがそれでももどかしい。ようやく満ち足りた心であたりを見廻した頃には、神かくしにでもなつたのか今までの、あやつり人形の乱舞はうそのように静まりかえつていた。そして同行の諸氏は前方はるか彼方で、ドクトル一人とり残される結果となつた。

こうなつては覚悟をきめる以外には手がないが、しんがりをつとめることもまた至難の業であつた。ようやく中管で追いついた頃には、一同いつせいに分散隊形をととのえウスバシロらしいというので突撃の最中である。おくれじとムラサキケマンなどエンゴサク科の花を求めて、ウスバシロを求めて歩きにあるいたが一向に姿を見せない。※採集案内※もいい加減なものだ何が多産だ。畜生、ウスバシロだけが昆虫ではない精力の浪費になるだけだと気がついた。

そのうち誰か一人ようやく一匹つかまえたというので大きわざだが、そんなことにはもう心をまどわされるもんか。とにかく若荷峠への道を小川に沿って油断なく進む。出たノ中型のトンボだ。真ザーメン流の極意無意識に出した網にピタリと納まった。何気なくのぞくとまぎれもなくムカシトンボ、しかも♂である。思はずニコリ、ドクトルの顔がほころんだ。この様子ではまだまだ可能性があると思廻して行くうち、さらに2♂、1♀を捕える精力の配分よろしく尻上がり元気を出して峠近く登りつめる。ちよつとわき道へそれるとカミキリらしいものが飛んでいる。数メートルずつとんでネットし毒びんに入れる前にまだいないかとよくばつてあたりを見るとすーとまたまた一匹目の前をかすめ去ろうとする。これには面くらつて、登んだままの網を出してこれにとまらせず早く捕えた。倉敷昆虫館にも展示していない代物ノしてやつたり珍品いつちよう。カミキリ専門の青野孝昭氏に見せると「ホウどこでとつた?」と声が上がつてしまつている。ヨコヤマトラカミキリとのことで、その場所に青野氏は急行した。柳の下に何匹もどじようは居るもんか。ド

クトル・ザーメン再びニコリニコリと二度顔のキン肉がほころんだ。当日第一の獲物、残念なことに岡山県境よりわずかにばかり鳥取県側に入つている。岡山側へ追いこんでから捕えたらなどと勝手なことを言う奴もいたが、ともかく岡山県下初記録を逸した。

ヨコヤマトラカミキリ以外には目ぼしい獲物なく帰途につき、早い目に黒坂駅について網もたたみしばらく休息していると、総社から参加の赤帽子もあざやかな高校生2人がウスバシロを数十四もとつて得々とひき上げてきた。駅のすぐ裏の墓地付近で今まで頑張つていたとのことで、本隊とは別行動をとつたのだ。

陽が照つておどり出してきたのを待伏せして全く勞せずしてつかまえたんだそうだ。

汽車の発車まで十数分、ドクトル・ザーメンしまつていたアミ、スプリングバネ、捕虫柄をつかみ出すとあたふたと現場へとんだ。温厚な重井院長も急ぎ足で米られる。われもわれもとその他大勢続々と後に続いた。泰山鳴動、ウスバシロ0匹、重い足どりで未練げに後をふり返りふり返りしながら帰らざるを得なくなるとはつゆ知る由もなく。(昭和41年2月3日)

## おとしぶみ

### カミキリムシの新しい記録

#### 1. *Ceresium longicorne* Pic

ヒゲナガヒメカミキリ

1964年4月19日 高梁市広瀬の駅付近の山より幼虫のいる枯木(名称不明)を持ち帰り羽化を待つていたところ8月10日前後に3頭の本種が脱出した。

また1965年2月14日、吉備郡昭和町日羽のカキの立枯している枝を持ち帰つておいたところ、本種が6月23日に1頭、7月10日に2頭、7月13日に3頭脱出した。

なお、本種は南方系のもので本州での記録は少ないようで、県下においては初めてではないかと思われる

#### 2. *Phymatodes testaceus* Linne

クビアカルリヒラタカミキリ

1965年5月25日新見市新見の路上を飛翔中の本種を1頭得た。近畿地方以北では記録されているが、西日本では広島県下で2個所において発見されており、岡山県に産するのは当然であろうが、県内での記録はないようである。(「広島虫の会々報」1号)

以上2種とも倉敷昆虫館に展示してある。

なお、文献の調査、同定をお願いした重井、青野両氏に深謝致します。(岡本 忠)

## 目 次

トカラ列島採集品目録 (秋山博志・前田高四雄) .....	1
南アルプス採集品目録Ⅱ (水野弘造) .....	2
おとしぶみ・四国産甲虫数種 (水野弘造) .....	3
南西諸島採集記 (秋山博志・西 伸一郎) .....	4
おとしぶみ・大山産甲虫二題 (水野弘造) .....	18
ギフチョウの幻想 (松野 宏) .....	19
ドクトル・ザーメン 採集回顧録 (8) .....	20
おとしぶみ・カミキリ虫の新しい記録 (岡本 忠) .....	21
会 員 だ よ り .....	21

医 療 法 人

**重 井 病 院**

倉敷市幸町 TEL 代表 ☎ 3 6 5 5